

国士館館歌のおはなし

国士館の歌といえば「国士館館歌」。歌詞の中には、創立以来の伝統がたくさん詰まっています。歌詞に込められた意味やその歴史をみてみましょう。

①国士館館歌の成り立ち — みんな一度は必ず歌いました

国士館館歌は、国士館の学生であれば、入学式や卒業式で必ず一度は歌うもの。

国士館100年余の歴史の中で、国士館に在籍した約15万人の卒業生や、建学にかかわった先人たちも、一度は歌っているものです。いわば、館歌ひとつで、皆さんも多くの人々につながっています。

このような伝統ある館歌の歴史とその意味について見てみましょう。

②国士館館歌の成り立ち — 「ここ武蔵野の一義塾」♪

国士館が創立する前の1917(大正6)年9月、「青年大民団」の「大民団歌」が作られました。これが館歌の前身です。青年大民団とは、創立者柴田徳次郎ら青年有志らが集い、社会改良のために活動していた団体で、国士館の前身にあたります。この大民団歌の歌詞はまったく異なりますが、曲は現在の館歌に近い譜面となっています。

そして、1920(大正9)年3月、国士館館歌が作られます。しかしこのときの歌詞は、現館歌とは異なっています。残念ながら楽譜が現存していないため、どのような歌だったかは不明です。

さらに1925(大正14)年、国士館中学校が設置された頃には、現館歌と同じ歌詞となりました。ただし、一番の最後が「ここ武蔵野の国士館」が「ここ武蔵野の一義塾」という歌詞でした。

編曲は、1953(昭和28)年頃に石川太郎によって楽譜に少し修正が加えられ、現在に至っています。

③歌詞に込められた意味 — 国につくす人、「国土」たるべし

歌詞内容の概略ですが、一、二番は、国士館校地の優れた環境を、三番では建学の精神たる「国土」としての使命感を歌っています。なお、歌詞の内容については、国士館史資料室に所蔵されている資料を参考にしています。この資料は、1971（昭和46）年頃に、学生に配布されたものです。

ちなみに、作曲者の東儀鉄笛は、有名な「都の西北 早稲田の杜に…」ではじまる早稲田大学校歌の作曲者でもあります。

国士館館歌

作詞：柴田徳次郎 作曲：東儀 鉄笛 編曲：石川 太郎

一、 霧わけ昇る ^ひ陽を仰ぎ
梢に高き 月を浴び
みくに ゆる ^{ますらお}皇国に殉す 大丈夫の
ここ武蔵野の 国士館

夜明けと共に、霧深い松陰神社の森から、朝日が昇るのを仰ぎ、夕刻には、松陰神社の森の梢に、高く出る月の光に包まれる。
貴い国である日本に、力を尽くす「国土」を養成するのが、この地にある国士館である。

※建学当初、現在の世田谷キャンパス周辺（武蔵野）は、畑が多く民家も少なかった。周囲を見渡せば、他の障害物もないので、国士館に居ながら日々、富士山を一望することができた。

二、 松陰の祠に ^{せつ ま}節を磨し
豪徳の鐘 ^{すま}気を澄す
朝な夕なに ^{いき}つく呼吸は
^{おろし}富嶽嵐の 天の風

国士館の東に隣接する地には、幕末の志士吉田松陰を祀る松陰神社がある。国のために一身を捧げた吉田松陰の志を偲び、常に礼節を磨く。
そして、西に位置する豪徳寺では、朝・夕に鐘が鳴る。その梵鐘の音を聞けば、自然に心が静まり、読書し学問に励もうという意欲が湧き出るのである。
国士館での一日は、富士の霊峰から吹きおろす清い風、澄みきった空気を胸いっぱい吸い、その学生生活をおくるのである。

三、 区々現身の ^{うつしみ}粗薪に
大覚の火を ^{とも}打ち点し
三世十方 ^{さんぜじっぽう}焼き尽す
至心の焰 ^{ほのお (煽)}あふらばや
至心の焰 あふらばや

われわれは、宇宙の広大さから見れば、本当に小さく、薪のようなものであるが、その身体には躍動する生命がある。
国士館の教育によって、心身を鍛え、その生命にともした大きな覚りの火を、世界へと広げていこう。
まるで「三世」（過去・現在・未来）と「十方」（四方・四隅・上下）、すなわち無限の時間と空間に、不浄なもの一切を焼き尽くす炎が、盛んとなり、広がっていくように。
国士館で学ぶ学生・生徒は、至心の覚りをもって、世界の進展に尽くすのである。